

## 令和元年度「不登校に関する研修会」(第1回代替) 講義記録

- 1 日 時 令和元年10月17日(木) 10:15~12:00
- 2 会 場 兵庫県立総合体育館
- 3 講 師 福岡教育大学教職大学院 西山 久子 教授
- 4 テーマ 不登校・長期欠席児童生徒の社会的自立 ～不登校支援に向けた多職種間の協働～
- 5 内 容
  - (1) はじめに
    - ・ 日本で学校カウンセリングを実施する場が少なかった時代には、海外をフィールドに活動していた。その中で子どもたちのセーフティネットを作ることの大切さを学び、関係機関の横の繋がり的重要性を感じた。
    - ・ アイスブレイクを兼ねて演習(2~3人組で「二者択一」)を実施。理由を話す機会を持つこと及び肯定的に話を聞いてもらう機会を持つことが大切である。
  - (2) 子どもの抱える状況
    - ・ 少子化により、子ども一人あたりにかかわる大人の数が多くなっている。その結果、自分で考えて物事を決定する機会が少なくなっている。また、きょうだいのトラブルが減り、仲直りの機会が減っている。
    - ・ スモールステップによる支援を行う際、段の高さを見誤ると乗り越えようと努力して成長する機会が失われる。その結果、葛藤に対する耐性が低下してしまう。思い通りにいかないことが起きた時、すぐに諦めてしまうことが多いのはこのためである。
    - ・ 教職員の年齢構成が激変している。経験豊富なベテラン教員が大量退職し、いぶし銀の技が失われつつある。
  - (3) 子ども理解について
    - ・ 心療内科において一般的に使われているのがバイオ・サイコ・モデルである。例えば、友だちの少ない子がリストカットした場合、まずアプローチするのはリストカットの問題である。つまり、緊急度の高いものから順に対応していくという考え方である。一方、健康度がもう少し高く、状態が良い場合に使われるのがスクール・カウンセリング・モデルである。例えば学習についていけているか、友だちと喜怒哀楽の感情がずれていないか、自分の好きなことや得意なことを自覚しているか、等の観点からその子を捉えるというものである。
    - ・ 教室で過ごせない子どもにとって、何が足りていれば安心して過ごせるのかという視点で捉えることが大切である。その時に、何か柱立てをして整理する必要があるため、このようなモデルを参考にして欲しい。
  - (4) “適応”の捉え方
    - ・ 本人が適応できているのか、周囲の支援者が本人に適応しているのか、きちんと見分ける必要がある。そうしないと、例えば学年が変わった時や進学した時に元の状態に戻ってしまうことになる。
    - ・ 支援ニーズの高低を正しく見極めることも大切である。特に卒業(出口)が近づくにつれて、支援を減らし本人の自立を促す必要がある。
  - (5) チーム学校
    - ・ 文科省が目指しているのは、以前の鍋蓋型の組織ではなく、校内にSCやSSWといった教育以外の専門家はもちろん、地域を巻き込んだ形でやっていくというものである。
    - ・ 学校内にいるスタッフの中で教員以外の専門スタッフが占める割合は、日本は

約18%である。アメリカやイギリスに比べて随分低い。日本の学校の先生は、多様な専門性を発揮しなければいけない。多忙化に繋がっている。

- ・ 自分のクラスだけでなく、両隣のクラスに対してもポジティブな影響を出していくこと、それがチーム化への第一歩である。
  - ・ 教育相談体制の充実にむけてSC、SSWとの連携は不可欠だが、SCとSSWの役割が不明確であるという課題がある。文科省の通知でも、心理的視点と福祉的視点という大まかな区別はあるものの、具体的な記述内容に大きな差異は見られない。年齢（経験値）でも、頼める内容が変わってくる。
  - ・ 校長のリーダーシップはもちろん必要だが、不登校や特別支援教育、教科指導、部活動など、校内のあらゆる分野でリーダーシップを発揮するのは非常に難しい。校長はマネジメントに力を入れて欲しいと考える。ミドルリーダーの長所を生かして、上手に回して欲しい。
  - ・ 経験年数や臨時講師という立場に関係なく、学級担任であれば全ての先生にクラスの子どもたちとの関係づくりには努めて欲しい（一次支援）。見立てができないケースについては、教科担任や部活動の顧問など複数の先生による観察が必要になってくる（二次支援）。見極めがついた子については、より専門性の高い先生を交えて個別支援を検討していく（三次支援）。
- (6) 分析的視点による支援
- ・ 深刻さの度合い（横軸）と生活年齢や発達段階（縦軸）で整理する。
  - ・ 情緒的自立を促すためには、自己決定の機会を増やす必要がある。
  - ・ 自分で設定した目標を達成するために必要なエネルギー（体力、元気）がなければ話にならない。
  - ・ このような分析に基づいて対応策を考えるにあたり、1週間に数時間しか校内にいないSCやSSWに担ってもらうことはできない。常勤の先生にコーディネートしてもらう必要がある。その際、適切なスモールステップを組むことが大切である。
- (7) キャリア教育
- ・ 自分が目指すゴールに向けて、どのような準備が必要かというキャリアプランニング能力を、基礎的・汎用的能力の中で高めていけば良い。
  - ・ 一人一人に全て個別対応を実施することは難しいため、極力ガイダンス（全体指導）の中でやれることをやって、それでも難しい場合にカウンセリング（個別対応）を実施するという組み合わせが必要になる。
- (8) その他
- ・ 援助を行う際、リサーチ(R)、ビジョン(V)からのPDCAという考え方がある。厳選し、優先順位をつけながら見通し(=ビジョン)を持って援助していかないと、結局どれが効果的だったかがわからなくなる。
  - ・ ケース会議やコア会議など名称は様々だと思うが、気になる子を取り上げて援助内容を検討する定例の会議を持つことが大切である。
  - ・ 保護者に情報を伝達する際には、例えば、冷蔵庫に貼っておいて視覚に訴えるものを用意するなど、正しく伝わるように配慮することが大切である。
  - ・ 福岡市のような、チェックリストを元にしたチーム支援も有効である。
- (9) まとめに代えて
- ・ 今日、話したことは、学校適応を社会適応の準備に活用していくということである。自分にはどんなリソースがあるかという情報を正しく認識させ、段々と本人ができるように援助の手を減らすことが大切である。
  - ・ 管理職のリーダーシップは確かに必要だが、ミドルリーダーの情報提供の内容で管理職の判断も変わってくることもある。より良い判断が下せるように、どんな情報をどんな形で管理職に伝えるか、工夫して欲しい。